

ストによる実証ということについても、前に述べたとおり、彼のやり方そのものが文学作品の性質についての正しい認識の上に立って行なわれているとは言えない。したがって、彼の議論は、議論の進め方そのものに疑問がある。

本書の著者は、シェイクスピアそのものよりはむしろその批評家たちを批判しているとは言えるけれども、やはり、間接的には、シェイクスピアそのものが批評されている。著者は、シェイクスピア劇に多くの理不尽をみた。それでもなおかつ彼はシェイクスピアを尊敬しているらしいが、その間の説明は本書には何もない。もし本書の著者が、本書を書いた後にもなおシェイクスピアへの尊敬を失わないのであるならば、その理由こそ、彼がわれわれに告げるべきもっとも肝要なことであった。

A. L. French: *Shakespeare and the Critics*. Cambridge University Press, 1972. 239 pp.

Gyula Illyés: *Puštavolk*

加藤二郎

《プスタの民》は、小説ではなく、自叙伝だ。著者のジュラ・イリエーシュは、1902年に西ハンガリアのラーチュグレシュのプスタで生まれ、十歳の時までここで過ごし、その後一家と村へ引っ越した。彼は、その時までのプスタの思い出、父や、父方、母方の両祖

父母から聞いた話、つまり三代にわたるプスタの生活とその変遷を、ここで物語っている。彼は、1848年の革命時代のこと、汽車が開通した1860年代のことも、あたかも自分で体験したかのように生き生きと書き綴っている。それゆえ読者は——イリエーシュが、これを書いたのは30代であったのにもかかわらず——祖父の時代をも生きた90代の著者がこれを書いているような錯覚に陥るのである。彼には、他人の体験を自分のものにしてしまう強烈な詩的想像力と記憶力が備わっているように思われる。

以上のことからわかるように、《プスタの民》は、イリエーシュの自叙伝というよりは、イリエーシュ家三代にわたるプスタの記録と言いなおした方がいいかもしれない。だが、それではまだ足りない。というのも、彼がこれを書く唯一の意図は、〈ハンガリア民族の一階層の特徴の大略を記すことだ。わたしはときおり自分の体験を織りまぜるにせよ、それはこの階層の説明のためにするにすぎない。よそ者の目を恐れ、いや、明るい白中の光に出ることを恐れて、自分の中に渦巻いている本質を隠している民族精神の深みに、そしてその民族精神の内部にひそむほむらに突き進むために、わたしの思い出はわたしを助けてくれる。わたしの経験から考えれば、局外者でもハンガリア民族精神を知ることではできであろうが、それをほんとうに理解できるものは、あの階層出のものだけなのだ。〉

この文章からわかることは、著者イリエーシュは、まず第一にハンガリア民族の一階層、つまり〈プスタの民〉の実態を、ここで明らかにしようとしていることである。この書が英訳されたときに、《The Times Literary Supplement》が評した言葉を援用すれば、プスタの〈叙情的な社会学〉を、ここで論じようとしていることである。そして第二に、

著者はプスタの民をはじめて明るみに出すことにより、それを通じてハンガリア民族精神を明るみに出そうと意図していることである。彼は、プスタをハンガリアの縮図と見ているとも言えよう。また彼は、ハンガリア人の美德については、いろいろ報告されているから、ここでは報告されていない面を叙述したいとも言っている。つまり、いろいろな意味をふくめて、ハンガリアの恥部をここで描き出し、その現状を訴えたのだとも言っている。第二次大戦後、〈プスタの民〉という階層は解消したはずである。千年来、求めて求めえなかった土地を分与されて、彼らは自作農として出発したはずである。生活も徐々によくなっていることだろう。では、それ以前にあった、そしてイリエーシュがその実情を訴え、それを明るみに出した《プスタの民》とは、どういう民であったのか。その紹介が、私のつとめである。

まず、プスタとは何か。それは世間周知の広漠たるハンガリアの大草原を、ここでは意味しない。ここでのプスタとは、大荘園の中心にある下僕長屋群、各種の家畜棟、納屋、穀物倉などからなる集落のことである。それは、ほぼ農村程度の大きさの場合もあるが、農村とは性格をまったく異にする。では、農場かといえば、農場では二・三家族が暮している程度だが、プスタでは百ないし二百家族が暮していることもまれではない。西ハンガリアのプスタには、小学校と教会が大抵あった。そして、鉄格子の塀と堀をめぐらした領主の城が、付近にあった。だが、この城には領主が住むことはほとんどなく、その代りに派遣されてきた所領地役人の管理官、監督官などが、下僕たちのいっさいを管理していた。つまりプスタとは、大荘園で働く牧夫（羊飼、雌牛飼、雄牛飼、豚飼、肥やし飼など）、御者、車大工、鍛冶、その他のも

のが、領主とのきびしい雇用契約のもとで、毎日朝三時から夜まで労働する大農場と、彼らの集団住宅を意味し、彼らがほとんど一生涯そこで暮さざるをえないようなしくみをもつ下層社会のことである。それゆえ——この書が 1936 年に公刊されたのにもかかわらず——読者は封建制の中世を読む思いがするのである。

当時の日本人によるハンガリア紀行文を読むと——横光利一は昭和 11 年（1936）に、このつねに他民族の圧制下にあったハンガリアは、〈いままたイタリアの手が八分まで延びている〉と、記している。また野上弥生子は、昭和 14 年に、当時のこの国のナチ化に言及して、その理由を〈ハンガリアの封建性はまだ深い根を張り、すべての支配は貴族と、金持と、地主の手に握られている有様だから、ナチは民衆運動で、農民の強い支持をもって〉と書いている。イリエーシュが、このイタリアとドイツのファシズムに関心と恐怖をいだかなかった理由はひとつもない。だが、《プスタの民》では、この影響については一言も触れられていない。むしろプスタの民が長年にわたり隠れ、離れ、孤立していた階層であり、このような外的影響に無関心であったことが繰り返して述べられる。そしてそれが、封建的世界にとり残されたこの民の姿を、いっそう色濃く伝えるのである。

ところで、ここで重要なのは、歴史からとり残されてきたこのプスタの民が、じつは〈ハンガリアの全耕作面積のほぼ半分を耕作している〉、農業国ハンガリアを支える重要な社会層であったという事実である。この事実が、著者をしてプスタの民の実情を訴えさせ、さらにこの民の過去をまさぐらせ、またこの民を苦しめている法律、経済方面をも研究させた原動力となっているのである。イリエーシュは、前述したように、すくなくとも

三代続きの、それゆえ生粋のブスタっ子である。父方の祖父は、ネバーンドのブスタの羊飼いであり、母方の祖父はラーチェグレシュの車大工であった。そして彼らの妻も、やはりブスタの出であった。というのも、ブスタの掟で、ブスタの民同志でしか結婚できなかったとはいえ、村の娘でブスタに嫁にくるようなものはたえてなかったからである。つまり、どのブスタも他の社会から差別を受けて、いや応なく村や町から隔絶して、ハンガリアの陸の孤島と化していたのである。

むろんブスタの民は、このような状態に満足していたわけではない。しかし、ドージャヤコシュートの場合のように、解放を求めたものすごい百姓一揆を起こしても、その反動でひどい目を見たのは、賤民の百姓の彼らであり、またこの際なんらかの改革がなされても、それで利を得たのは土地持ちの村の百姓だけだったのである。ブスタの民は、歴代の国君からも、革命家や学者たちからも、(いついかなる時にも忘れられる民であった。それは習慣になっていた)。それゆえ彼らは、もはやみずから解放を求める気を失っていた。しかしみずからの土地もなく、(千年も続いた完全に動産化した生活)は、彼らにとって屈辱だった。彼らは、ブスタの彼方に点在する村を、あこがれのまなざしでみつめていた。村のひとつで確固とした地位を得ること、これが彼らの切実な願望だった。だが、それを実現できたものはごく僅かであった。それは、まず精神的に困難だった。というのも、なん世代もブスタから離れることができずにいた彼らにとっては、ブスタ以外の土地は、考え方も習慣も完全に違う異国に等しかった。それゆえ、ブスタの生活秩序を捨てようとするものは、まず(蛙がオタマジャクシの醜い姿を忘れるように)、彼らのブスタ的性格を忘れないければならなかった。ブスタの雰囲気

捨てるものは、(心臓と肺を変えなければならぬ。さもないと、新しい環境の中で滅んでしまう)からであった。このような苦痛な精神的変容をとげるのは、まず至難な業であったろう。そして、これが物質面でも困難であったことは言うをまつまい。子供をブスタから抜け出させようとすれば、まず教育が必要だった。だが貧しいブスタの民は、子供をブスタの小学校に通わせること自体を、快く思わなかった。子供を働かせて、家計を補おうと、たいていの親は考えていた。それゆえ、子供をさらに村や町にある中学に通わせる余裕のある民は例外だった。さらに高等教育を受けるとなれば、よほどの僥倖の重なりが必要だった——この点で、イリエーシュの、とくに父方の家系は、ブスタ中の例外中の例外だった。ひとりの伯父は県知事にまでなった。また親が、村で人並みに暮そうとすれば、それなりの手仕事を習得するための金と暇とが必要であった。法令では、ブスタの民に休日を与えることになっていたが、そのような改善的な法令がブスタで実行されたためしがなく、日曜日でも働かなければならなかった彼らにとって、そのような暇はないに等しかった。けっきょく、村にあこがれても、(ブスタを離れる道は、ふつうはもっぱら下へ向う道)だったのである。それゆえ彼らは、逆にブスタを離れることを恐れ、(まさぐるようにして出した小指を、寒そうにしてすぐにひっこめ)、恭順な下僕の民の境界を捨てなかったのである。

以上は、この作品の枠組みの紹介である。つぎに作品の内容の紹介に移れば、これはいちいちとあげることができないほどに多種多様な、ブスタの民の生活一般のきわめて興味深い叙述の連続である。だが、ほかからの影響を受けずに孤立し、しかも変革がない世界ならば、そこにはハンガリア古来の考え方

や風習が、そのままの形で豊富に残っていると想像することはできるであろう。じじつ、バルトークの有名なハンガリア古謡の収集のうち、三分の一はこの作品の舞台となっている地方で行なわれたという。

たとえば、プスタでは、私有財産権という考え方は、あまり強力に発達しなかった。というのも、数万ヨークに及ぶ広大な領主の土地を彼らが耕作してきた、〈地平線にまぎれこむまでに打ち続く小麦やライ麦の緑と黄の大波は、その限りなく大きなうねりのために、私たちの共有財産である空や海と酷似していた。そのため、プスタの民の目には、これが主人のものではなくて、空や海と同様に彼らの共有財産と写った〉からである。それゆえ、村の百姓の畠のもろこしであれ、領主のもろこしであれ、彼らにとってはいずれも共有のもろこしであり、それは〈みだりに自分のもろこしに手をつける以前に、誰でもが取ってよろしいもの〉だったのである。したがって、別の世界では盗みに類することが、罪意識なく往々行なわれた。土地の分配と同様に、なん百年來肉体の所有のことでも一方的なとり決めしかなされていなかったのも、プスタの民は肉体の私有ということでも、これを重大視しないようになっていた。処女性を守るよりも、操を守ることが高く評価された。夫は妻の情事に寛大だった。つまり、この世界では、〈肉体的に操を守らずに操を守る〉という考え方が一般的だったのである。また、下僕長屋では、一部屋に数家族が雑居していた。そのため子供たちは早期に性生活を見聞することとなった。このような住居事情とプスタ固有の所有に関する考え方に由来する話だが、じじつに豊富に展開する。ひとはここに乱脈を予想するかもしれない。だが、プスタにはプスタの秩序があり、そういうことにはならない。話は、かなり猛烈な場合もあるが、

じじつに自然でおおらかな印象を与える。

プスタ社会は、上意下達の秩序がきびしく守られている社会である。所領地役人が上に立ち、その下に中間的指導層を形成する、プスタの民のエリートである管理人や監督などがある。彼らは、プスタの民の各職掌の組頭であり、組下の下僕や季節雇いや日雇いの労働者（その多くは小作人）に、役人から下された毎日の命令を伝達し、これをいやが上にもきびしい形で実行に移す階級である。この組頭の役目は、プスタの下僕の各職掌と同様に世襲である。羊飼いの頭の子供が、いずれは羊飼いの頭になるように、使い走りの下僕の子は、どう転んでも羊飼いの下僕とはなれず、使い走り以上のものにはなれない。職掌間に給与の差はなかったが、このようにその間にはプスタ特有の尊卑の序列が支配していた。古来からある職業として、羊飼いはもっとも尊い職業とみなされ、煙草栽培人は豚飼よりも卑しいとされ、牛飼いは御者より序列が上とされた。さて、プスタの民は、朝三時から、〈日に 16 時間から 18 時間あくせくと働く——しかもなん 10 年も続けて。〉これを別の世界の労働のテンポで果たせば、たちまち参ってしまうだろう。それゆえ彼らは、彼らが扱う鈍重な牛のテンポで、悠長に労働する。〈やつらは、涙をかむにも半日かかる〉と、役人が腹を立てるゆえんである。だが、プスタの民のこの悠長な動きを、高速度写真のカメラでとらえたように、克明に描写するイーシュの筆はさえており、下僕の民は悠長の時間とともにあり、役人たちは命令の奴、時間の下僕と化しているようにみえてくる。プスタの民は、心は服従と恭順の権化であるが、手は怠惰なのだ。これを仕事に駆りたてるのが中間指導層の監督、下僕頭である。とうぜん彼らは始終怒気を発しており、これが習性となっている。ここでも上意下達方式

で、猛烈な罵詈雑言による叱責と折檻とがたえず行なわれる。下僕は目上のものから受ける悪態や殴打を、〈アジア人的冷静さ〉でこらえる。こうしてプスタにおけるびんたの張り方、折檻の際の鞭などの使用の可否、各プスタ間でのそれらの相違点などが論じられる。ところで、上意下達方式で猛烈に面罵され折檻され、それを忍従する底辺の下僕たちは、その吐け口をどこに見出すのか。それは、日常茶飯事と化した〈喧嘩〉と〈罵詈雑言〉のかぎりない流露によってなされる。とくに、怒りと憤激と憎悪の表現である後者の方は、プスタの民の間で華麗なまでに発達した。それは、喧嘩の時に使用されるだけではない。挨拶やお世辞を言う場合でも、また恋の語らいの場合でも、彼らはあくどい呪詛の羅列で、それを表現するのである。だがイリエシュは、そこにあるじつに適切な観察と、大胆な連想と即興性、格調高いリズム、イメージの真に芸術的な豊饒さに感歎し、この即興の才能はヴォグレル語系の詩文を想起させると言っている。

私は、《プスタの民》のあらましの一端を、以上紹介してきた。この社会は、飢えと重労働、折檻、打擲、喧嘩、呪詛の言葉がつねに支配している荒々しい世界であった。だが、このような世界にも、もちろんプスタをあげて楽しむ伝統的な風習や行事がある。たとえば、暴飲暴食と踊りを中心とする結婚式、春を祝う叙情的な祭りや五月柱の行事など。私は、この《プスタの民》の喜怒哀楽の生活の一齣一齣を読んでいると、ブルーゲルの農民の絵を想起せざるをえない。ブルーゲルの農民たちが、スペインの圧制下にあったという運命が、プスタの民の運命と重なるためだろう。《プスタの民》の全体は、ブルーゲルの絵がもっている澄んだ美しい緊張を、かならずしもはらんでいるとは言えない。だが、

個々の光景は、ブルーゲルの絵の細かな描写のひとつひとつを目をこらして見ている時と同様の、ひどくひとをなつかしい思いに誘いこむ人間臭い魅力を、豊富に蔵しているのである。

Gyula Illyés: *Puštavolk* (Budapest, 1969) [Titel des Originals: *Puszták népe* (Budapest, 1936)]

Dee Brown; *Bury My Heart at Wounded Knee*

平野 信 行

ベストセラーかならずしも良書ならず、というのが世間の通り相場のようなのだが、50 週以上もベストセラー・リストの上位を下らないとなれば、その書物にはそうなるだけの何らかの価値があるに違いない。一口に 50 週というが、考えてみると、これはほぼ一年に等しい。特定の本が一年以上も声価を維持し続けるというのはたいへんなことで、ほとんど例を見ないことではなからうか。ここにとりあげた Dee Brown の著書はそのたいへんな書物である。なにしろ、1971 年 1 月に Holt, Rinehart & Winston から初版が出て以来、同年 10 月までに版を重ねること 10 度以上、その間 Book of the Month Club, Playboy Book Club 他の Book Clubs の選定図書に入るなどして、1972 年 4 月まで、ほとんどベストセラー・リストの首位を譲らなかったのだから、本書がいかに読者大衆にアピールしたか想像に難くない。